



記者を呼び集めてロビーで会見した。

藤原義江にとって下関は故郷である。彼は貿易会社・瓜生商会の支配人であった英国人の父と日本人の母の間に生まれた。昭和三年（一九二八）、二十九歳のとき中上川あきと再婚した。二児を置い

て離婚、単身ヨーロッパへ行って藤原と再婚した中上川あきは、中上川彦次郎の娘であった。藤原夫妻と下関には深い縁がある。

二十五年の結婚生活のちに藤原義江と別れたあきは、NHKテレビ「私の秘

密」の回答者となって知名度を高め、昭和三十七年、参議院のタレント議員第一号となったが、五年後、在職中に亡くなった。藤原義江はあきより十年長く生き、昭和五十二年、帝国ホテル住まいのまま死んだ。七十七歳だった。



山陽ホテルについて、開業直後の「鉄道時報」によると、一夜の宿泊料は一室一名一晚、二食事及び一回のチー（お茶のこと）と入浴を併せて三元八十銭也。現在は閉鎖中で入館はできない。

「山陽ホテル」の栄華、今いずこ

旧下関駅はよい建築であった。終着駅の風格があった。写真から偲ぶばかりだが、門司港駅より立派だった。

この駅が現存していれば観光資源になったのに、と思わぬでもないが、それは無理な願いである。関門鉄道トンネルが開通したとき、トンネルの位置にあわせて彦島方面へ線路は延伸され、下関駅は現在の場所へ移った。下関駅は終着駅ではなくなり、旧駅も歴史的役割を果たし終えた。三年後の昭和二十年（一九四五）、空襲で焼かれ、完全に姿を消した。

二度の空襲に加えて、全国に投下された機雷の半分近くが関門海峡に集中し、

関釜航路の船がしばしば魚雷攻撃を受けたのは、下関が重要な攻撃目標だったからである。海峡には約三百隻が沈み、沈船のマストが林立した。そのため戦後もその処理が終るまで海峡通過ができなかった。皮肉なことに、海峡でもっとも魚が釣れたのはこの時期だった。

いま旧駅付近で往時の面影をとどめるのは、ただ山陽ホテルの建物、というより廃ビルだけである。明治三十五年（一九〇二）、旧駅開業の翌年に建てられたのは木造二階建のホテルだった。大正十一年（一九二二）に失火で焼失、大正十三年に再建されたその建物が現在にきわどく残る。空襲を受けたが全焼はまぬがれた。しかしホテル機能は失って、そのまま廃業した。

国内にあった国鉄直営のホテルは、東京ステーション・ホテル、奈良ホテル、それにこの山陽ホテルのみで、営業成績より格式を重んじた。食堂の、紫の振袖に白いエプロン姿の給仕は、下関の高等女学校卒業生の憧れの職業だった。

下関は、シベリア鉄道、満鉄、朝鉄とつなぐ「欧亜連絡」ルートの終着駅でも

鉄のアルバム ③



現在の長府外浦町付近を走る路面電車。山陽電軌長関線は昭和44年（1969）に廃止となった。旧下関水族館は同31年に開館。丘の上に併設された「鯨館」は今も建物が残る。撮影＝昭和30年代頃

あったので、皇族からベープ・ルースまで宿泊客は多彩だった。満鉄総裁・松岡洋右や朝鮮総督・宇垣一成は内地の土を踏むとすぐ山陽ホテルで記者会見をした。ネタに困った新聞記者も、「欧亜連絡」列車経由の客が着く日に山陽ホテルにいれば、何かしら記事が拾えた。

テノールの世界的歌手、藤原義江は帰国の際には必ず山陽ホテルに泊まった。彼は連絡船から降りたとたん、自ら新聞